増補訂正 中等國文

五の巻下

375.9
I n15
資料室

30286
教科書文庫
3
810
41-1899
20000
39199
M32
1899

廣島大學圖書之印
廣島大学 教 39199 図書

資料室

明治三十二年六月十九日
文部省檢定濟

井上賴圀
逸見仲三郎 編纂

增補訂正 中等國文

東京 吉川半七藏版

增補訂正 中等國文五の卷下

目次

			頁
第一	徒然草 第一段	卜部兼好	(一)
第二	徒然草 第二段	卜部兼好	(三)
第三	徒然草 第十段	卜部兼好	(四)
第四	徒然草 第十一段	卜部兼好	(六)
第五	徒然草 第四十一段	卜部兼好	(六)
第六	徒然草 第五十二段	卜部兼好	(八)
第七	徒然草 第五十三段	卜部兼好	(九)
第八	徒然草 第八十段	卜部兼好	(一一)
第九	徒然草 第八十八段	卜部兼好	(一二)

第十　徒然草 第八十九段　卜部兼好（一三）
第十一　徒然草 第九十二段　卜部兼好（一五）
第十二　徒然草 第百九段　卜部兼好（一六）
第十三　徒然草 第百五十段　卜部兼好（一七）
第十四　徒然草 第百五十七段　卜部兼好（一八）
第十五　徒然草 第二百十一段　卜部兼好（一九）
第十六　徒然草 第二百十五段　卜部兼好（二一）
第十七　徒然草 第二百三十六段　卜部兼好（二二）
第十八　徒然草 第二百三十七段　卜部兼好（二三）
第十九　皇極天皇　水鏡（二五）
第二十　天智天皇　水鏡（三〇）

第二十一　嵯峨天皇　水鏡（三二）
第二十二　藤原時平　大鏡（三九）
第二十三　源平二氏　増鏡（五一）
第二十四　後醍醐天皇の還幸　増鏡（百一）
第二十五　世繼　榮華物語（七二）
第二十六　月の宴　榮華物語（七八）
第二十七　御賀　榮華物語（八〇）
第二十八　土佐日記　紀貫之（八五）

增補訂正 中等國文五の巻下目次終

廣島大學圖書之印

なしたる所は、差入りたる月の色も、ひときは、しみ〴〵と見ゆるぞかし」。いまめかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、すのこ、すいがいのたよりをかしく、うちある調度も、むかしおぼえて、やすらかなるおそ心にくしと見ゆれ」。おほくのたくみの、心をつくしてみがきたて、唐の、大和のめづらしく、えならぬ調度ども、ならべおき、前栽の草木まで、心のまゝならず、作りなせるは、見るめもくるしくいとわびし。さてもやはながらへ住むべき。又時のまの煙ともなりぬむとぞ、うち見るよりもおもはるゝ」。おほかたは、家居にこそことさまは、おしはかられ。

第四　徒然草第十一段　卜部兼好

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、はるかなる苔のほそ道を踏分けて、心ぼそくすみなしたる菴あり。木の葉にうづもるゝかけひの雫ならでは、露おとなふものなし。閼伽棚に菊、みちなどをりちらしたる、さすがにすむ人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、おほきなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしくかこひたりしこそ、すこしことさめて、この木なからましかばと、おぼえしか。

第五　徒然草第四十一段　卜部兼好

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雑人立ちへだてゝ、みえざりしかば、各おりて、らちのきはによりたれど、ことに人おほくたちこみて、わけ入りぬべきやうもあらし。かゝるをりに、むかひあるあふちの木に、法師の上りて、木のまたについゐて、ものみる有り。とりつきながら、いたう睡りておちぬべき時に、目をさます事度々なり。これを見る人、あざけりあざみて、世のしれものかな。かくあやふき、枝の上にてやすき心有りて、ねぶるらむよといふに、我が心にふと思ひしまゝに、われらが生死の到來、たゞ今にもやあらむ。それを忘れて、もの見て日をくらすおろかなる事は、なほまさりたる物

をこいひたれば、前なる人ども、まことにさにこそ候ひけれ。最おろかに候ふこといひて、みなうしろを見かへりて、こゝへいらせ給へとて、所をさりて、よび入侍りにき」。か程のことわり、誰かは思ひよらざらむ。なれども、折柄の思ひかけぬ心ちして、胸にあたりけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて物に感ずる事おきにあらず。

第六　徒然草第五十二段　ト部兼好

仁和寺にある法師、年よるまで、石清水をおがまざりければ、心うく覺えて、ある時思ひたちて、たゞひとりかちよりまうでけり。極樂寺、高良おごを、をがみて、かばかりとこゝろえて、かへりにけり。さてかたへの人に逢ひて、

年頃おもひつる事、はた〳〵侍りぬ。聞きしにもすぎて、たふとくこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに、山へのぼりしは、何事かありけむ。ゆかしかりしかど、神へまゐることそほいなれとおもひて、山までは見ずとぞいひける。」すこしの事にも、先達はあらまほしきことなり。

第七　徒然草第五十三段　ト部兼好

是も仁和寺の法師、童の法師にならむとする名殘とて、各あそぶ事有りけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて顔をさし入れて、舞出でたるに、滿座興に入ることかぎりなし。しばし〳〵かなでゝ後、ぬがむと

するに、大かたぬかれず。酒宴ここさめて、いかゞはせむ
とまどひけり。とかくすれば、くびのまはりかけて血た
り、たゞはれにはれみちて、息もつまりければ、打ちわら
むとすれど、たやすくわれず。ひゞきて、たへがたかりけ
れば、かなはですべきやうなくて、三足なるつのゝ上に
かたびらを打ちかけて、手をひきつゐをつかせて、京な
るくすしのがり、ゐて行きけるに、道すがら人のあやし
み見る事かぎりなし。醫師のゐもとにさ〳〵入りて、むかひ
ゐたりけむありさま、さこそこそやうなりけめ。物をい
ふも、くゞもり聲にひゞきて聞えず。かゝる事は文にも
見えず。傳へたるを〳〵へもな〳〵といへば、又仁和寺へ歸

りて、〳〵た〳〵き者、老いたる母ゐど、枕上によりゐて、ゐき
かな〳〵めども、きくらむとも覺えず。かゝるほどに、ある
ものゝ云ふやう、たゞひ耳鼻こそきれうすとも、命ばか
りはなどか生きざらむ。たゞ力をたてゝ、ひき給へとて、
藁の〳〵べをまはりにさ〳〵入れて、かねをへだてゝ、頭も
ちぎるばかりひきたるに、耳鼻かけうげながらぬけに
けり。からき命まうけて、久くやみゐたりけり。

第八　徒然草第八十段　卜部兼好

人ごとに、我が身にうとき事をのみぞこのめる。法師は
兵の道をたて、夷は弓ひくすべしらず。佛法しりたるき
そくし、連歌〳〵、管絃をたしなみあへり。されどおろかな

るおのれが道よりは、猶人に思ひ侮られぬべ〜。法師のみにあらず。上達部、殿上人、かみざまゝで、お〜なべて武を好む人多かり。百たび戰ひて百度勝つとも、いまだ武勇の名を定めがた〜。其の故は、運に乘じてあだをくだく時、勇者にあらずと云ふ人な〜。兵つき矢きはまりて、つひに敵に降らず、死をやすくして後、始めて名をあらはすべき道なり。いけらむ程は、武にほこるべからず。人倫に遠く禽獸にちかきふるまひ、其の家にあらずば好みて益なき事なり。

第九　徒然草第八十八段　ト部兼好

ある者、小野道風がかける和漢朗詠集とて、持ちたりけ

るを、或人、御相傳うける事には侍らじなれども、四條大納言撰ばれたる物を、道風かゝむ事、時代やたがひ侍らむ。おぼつかなくこそといひければ、さ候へばこそ世にありがたき物には侍りけれとて、いよ〳〵秘藏〜けり。

第十　徒然草第八十九段　ト部兼好

奥山に猫またといふものありて、人をくらふなると人のいひけるに、山ならねども、こゝらにも猫のへあがりて、ねこまたになりて、人とる事はあなる物をと、いふ者有りけるを、何阿彌陀佛とかや。連歌しける法師の、行願寺の邊に有りけるが聞きて、ひとりありかむ身は、心すべきことにこそと、思ひけるころ〜も、ある所にて夜ふ

くるまで連歌〳〵て、たゞひとりかへりけるに、小川のはたにて、音にきく猫また、あやまたずあ〳〵もとへ、ふとよりきて、やがてかきつくまゝに、頸のほゞをくはむとす。肝心もうせて、ふせがむとするに力もなく、足もたゝず。小川へころび入りて、たすけよやねこまた、よや〳〵とさけべば、家々より松ゞともして、は〳〵りよりて見れば、このわたりに見しれる僧なり。こはいかにとて、川の中より、いだき起〳〵たれば、連歌のかけものとりて、扇小箱あご、懐に持ちたりけるも水に入りぬ。希有にして、たすかりたるさまにて、はふ〳〵家に入りにけり。かひける犬の、くらけれど、主を〳〵りて、とび付きたりけるとぞ。

第十一　徒然草第九十二段　卜部兼好

ある人弓いる事をならふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師の云ふ。初心の人、ふたつの矢をもつことなかれ。あとの矢をたのみて、はじめの矢に等閑の心あり。毎度たゞ得失あく、此の一矢に定むべ〳〵と思へといふ。わづかに二の矢、師の前にて、ひとつをおろかにせむと思はむや。懈怠の心みづからしらずといへども、師これを〳〵る。此のいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむことをおもひ、朝には夕あらむ事を思ひて、かさねて念頃に修せむことを期す。況、一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることをしらむや。なんぞたゞい

まの一念において、たゞちにする事のはなはだかたき。

第十二　徒然草第百九段　卜部兼好

高名の木のぼりといひ〳〵をのこ、人をおきて〻たかき木にのぼせて、梢をきらせ〳〵に、いとあやふく見え〳〵ほどは、いふ事もなくて、おる〻時に軒長ばかりにありて、あやまちすな。心しておりよと、言葉をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛びおる〻ともおりなむ。いかにかくいふぞと、申侍りしかば、其の事に候ふ。めくるめき枝あやふきほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちはやすき所にありて、かならず仕つる事に候ふといふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。

鞠もかたき所を蹴出〳〵てのち、やすくおもへば、必落つと侍るやらむ。

第十三　徒然草第百五十段　卜部兼好

能をつかむとする人、よくせざらむほどは、なまじひに、人に〳〵られむ。うち〳〵よく習ひえて、さ〳〵出でたらむこそ、いと心にくからめと、常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひうる事な〳〵。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、そしりわらはる〻にも恥ぢず、つれなくすぎて、た〳〵なむ人、天性其の骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして、年をおくれば、堪能のた〳〵なまざるよりは、終に上手の位にいたり、徳たけ人にゆ

るされて、あらびなき名をうる事あり。天下のものゝ上手といへども、はじめは不堪のきこえもあり。無下の瑕瑾もありき。されども、其の人、道のおきてたゞしく、これをおもく〳〵して、放埒せざれば、世のはかせにて、萬人の師となる事、諸道かはるべからず。

第十四　徒然草第百五十七段　ト部兼好

筆をとれば物かゝれ、樂器をとれば、音をたてむとおもふ。盃をとれば酒を思ひ、さいをとれば、だうたむ事を思ふ。心は必事にふれて來る。かりにも、不善の戯をなすべからず。あからさまに、聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして、多年の非をあらたむる事も

ありかりに今此の文をひろげざらまゝかば、此の事をしらむや。是則ふるゝ所の益なり。心更におこらずとも、佛前にありてずゞをとり、鐘をゝらば、怠るうちにも、善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相も〳〵そむかざれば、內證かならず熟す。〳〵ひて不信といふべからず。あふぎて是をたふとむべし。

第十五　徒然草第二百十一段　ト部兼好

萬の事はたのむべからず。おろかなる人は、ふかく物をたのむゆゑに、うらみいかる事あり。いきほひありとて、たのむべからず。こはき物先ほろぶ。財多〳〵とて、賴むべ

からず。時のまに失ひやすし〳〵。才ありとてたのむべからず。孔子も時にあはず。德ありとて、たのむべからず。顏回も不幸なりき。君の寵をもたのむべからず。誅をうくる事すみやかなり。奴〳〵たがへりとて、たのむべからず。そむきは〳〵る事あり。人の志をもたのむべからず。必變ず。約をもたのむべからず。信ある事すくなし。身をも人をもたのまざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず。左右ひろければ、さはらず。前後こほければ、塞がらず。せばき時は、ひし〳〵げ碎く。心を用ふる事少〳〵きにして、きびしきときは、物にあらそひてやぶる。ゆるく〳〵て、やはらかなるときは、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地はかぎる所なし。人の性なんぞことならむ。寬大に〳〵て、きはまらざる時は、喜怒是ほさはらずして、ものゝためにわづらはず。

第十六　徒然草第二百十五段　卜部兼好

平宣時朝臣、老ののち、むかしがたりに、最明寺入道、ある よひの間に、よばるゝ事あり〳〵に、やがてと申し〳〵ながら、ひたゝれのなくて、とかくせし〳〵程に、又使來りて、直垂などの候はぬにや。夜なれば、ことやうなりとも、とくとあり〳〵かば、なえたる直垂、うちく〳〵のまゝにて、罷りたりしに、てうしに、かはらけとりそへて、もていでて、此の酒を獨たうべむが、さう〳〵ければ、申しつるなり。肴こ

そなけれ。人は靜りぬらむ。さりぬべきものやあると、いづくまでも求め給へと有りしかば、しそくさ〜て、くまぐまを求めし程に、臺所の棚に、小土器に味噌のすこしつきたるを見出で、是ぞ求めえて候ふと申〜しかば、事たりなむとて、心よく數獻におよびて、興にいられ侍りき。其の世には、かくこそ侍り〜かと申されき。

第十七　徒然草第二百三十六段　ト部兼好

ぬ〜ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入りくる事なし。あるじなき所には、道ゆく人みだりにたち入り、狐ふくろふやうの物も、人げにせかれねば、所え顔に入りすみ、こだまなどいふ、けしからぬかたちもあらはるゝ

ものなり。又鏡には、色かたちなき故に、萬の影來りてうつる。鏡に色かたちあらましかば、うつらざらまし。虛空よく物をいる。我等が心に、念々のほ〜きまゝに來りうかぶも、心といふもののなきにやあらむ。心に主あらましかば、そのうちに、若干のことは入來らざらまし。

第十八　徒然草第二百三十六段　ト部兼好

丹波に出雲といふ處あり。大社をうつして、めでたくつくれり。〜だのなにがしとかや。しる所なれば、秋の頃、聖海上人、其の外も、人あまたさそひて、いざたまへ。出雲をがみに、かいもちひめさせむとて、ぐしもていきたるに、各をがみて、ゆゝしく信おこ〜たり。御前なる獅子こま

いぬ、そむきてうしろざまに、たちたりければ、上人いみじく感じて、あなめでたや。此の獅子のたち樣いとめづらし。深き故あらむと涙ぐみて、いかに、殿原、殊勝の事は御覽じとがめずや。むげなりといへば、各あや〳〵みて、まことに他にことなりけり。都のつとにかたらむなどいふに、上人なほゆか〳〵がりて、おとなしく、物しりぬべき顏したる神官をよびて、此の御社の獅子のたてられやう、定めてならひある事にはべらむ。ちと承らばやといはれければ、その事に候ふ。さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候ふ事なりて、さしよりてすゑなほして、いにければ、上人の感涙いたづらにぬりにけり。

第十九　皇極天皇　水鏡

次の御門、皇極天皇と申しき。敏達天皇の、ひひこにおはします。舒明天皇の后にておはしき。御母、欽明天皇の御むまごに、吉備姫と申侍りしなり。壬寅年、正月十五日、位につき給ふ。世をしり給ふ事三年、女帝におはします。七月に、世の中日でりして、さま〴〵の御祈侍りしかども、そのしるし更になし。大臣蝦夷と申すは、そがの馬子の大臣の子なり。この事をなげきて、自かうろをとりて、祈りこひしかども、なほ驗なかりき。八月になりて、御門、河上に行幸し給ひて、四方を拜み、天にあふぎて祈りこひ給ひしかば、たちまちに、神なり雨くだりて、五日をへき。

世の中、みな直り、百穀ゆたかなりき。いみじく侍りし事なり。十一月十一日、そがの蝦夷の大臣の子入鹿、その罪といふ事もなかりしに、聖德太子の御子、むまご廿三人を失ひたてまつりてき。軍をおこして、いかるがの宮をかこみて、せめ奉りしに、太子の御子に、大兄王と申し丶、けものの骨をとりて、御とのごもりし所におきて、われはにげて、いこま山にいり給へりしに、入鹿がいくさ、火を放ちて、いかるがの宮をやきて、灰の中を見しに、物のほねありき。これを大兄王のなりと思ひて、かへりにき。入鹿が父の大臣、これをきゝて、罪なくして太子の御後を、うしなひたてまつれり。われら、ひさしく世にあるべ

からずと驚嘆はべりき。三年と申し丶三月に、天智天皇の、いまだ、中大兄皇子と申し丶、法興寺にて、まりをあそばし給ひし程に、御くつの、まりにつきて、落ちて侍りしを、鎌足のとりて奉り給へりしを、皇子うれしき事におぼして、其の時より、あひたがひにおぼす事、露へだてなく、聞えあはせたてまつりて、其の御するの今日までも、御門の御うしろ見は、し給ふぞかし。よき事もあしき事も、はかなき程のことゆゑに、出でくることなり。大臣蝦夷、其の子入鹿、家を作りて、内裏の如くに、宮門といひ、我が子等をも、皆王子と呼びたり。五十人の武者を身に從へて、出入に聊も立ちはなれざりき。かくて、偏に、世の政

事を執れるが如くなりしかば、御門、入鹿を失はむの御心ありき。又天智天皇の、いまだ皇子と申しゝも、同く此の事を御心に覺したちしかども、思のまゝならざらむ事を、思恐れし程に、鎌足、皇子をすゝめ奉りて、蘇我、宿禰山田石川麻呂が女を、かりそめに遇はせ奉りて、此の事を議りたまひき。六月に、御門、大極殿に出でたまひて、入鹿を召しき。入鹿めしに從ひて參りぬ。人の心を疑ひて、夜晝太刀を佩きてなむ侍りしを、鎌足なに事もなきさまに、たはぶれに云ひあし給ひて、太刀をとかして座にする給ひつ。其の後、十二門をさし固めて、山田石川麻呂をして、新羅、高麗、百濟、此の三韓の表を讀ましめ給ひし

に、石川麻呂、此の事を計りまたふを、心のうちにおぢ恐れ思ひけるにや。身ふるへ聲わなゝきて、えよまずなりにければ、入鹿、いかなれば、かくおぢ恐れ侍ると問ひしかば、御門に近附き奉ること、恐思ひ侍るなりと答ふ。かくて、入鹿が首を斬るべきにてあるに、其の事を承りたる人、二人あがらおぢ恐れ、汗を流して寄らざりしかば皇子其の一人を相具し給ひて、入鹿が前に進寄りて、其の人をして肩を斬らしめ給ひつ。入鹿驚き立騷ぎしに、又足を斬りつ。入鹿、御門に申して云はく。吾、何事の罪と云ふことを知りはべらず。其の事を承らむと申しき。御門驚き給ひて、何なる事ぞと問ひたまひしかば、皇子、入

鹿は、おほくの皇子を失ひ、御門の御位を傾け奉らむとすと申し給ひしかば、御門立ちて内へ入りたまひにき。此の折、遂に入鹿が首を斬りてき。其の後、入鹿が屍を、父の大臣に賜はせしかば、大臣大に怒りて、みづから命を亡して、蘇我の一門、時の間にほろび失せにき。

第二十　天智天皇　水鏡

次の御門、天智天皇と申しき。舒明天皇第二の御子、御母齊明天皇なり。孝德天皇、位に即きたまひし日、東宮に立ちたまひき。壬戌の年正月三日位に即き給ふ。世をしり給ふ事十年なり。七年と申しゝ十月十三日、鎌足内大臣になり給ふ。此の御時に、始めて内大臣といふ官は出來

しなり。御姓は中臣と申しゝを、藤原とたまはらせき。大織冠となむ申しゝ。かゝりし程に、御心地例ならず覺されしが、まこと〳〵く重りたまひし時に、御門行幸したまひて、おぼしおく事あらば、のたまはせよと、仰事あり〳〵かば、大臣今は限に侍り。何事をかは申侍るべきと、申し給ひしを、聞しめして、御門、御涕にむせびて還らせおはしまして、御弟の東宮を、又大臣の家におはして、のたまはせよとて、さき〴〵の御門の、御うしろ見多かりしかども、大臣の志に比ぶべき人更になし。われ一人、かくさり難く思ふのみにあらず。次々の御門、大臣の末を惠みて、年來の恩をば、必報うべしとのたまはせき。十六日に

遂にうせ給ひき。御門、嘆きかなしみ給ふ事限なし。さきに申侍りつるやうに、御門も皇子と申し、大臣もいまだ位あさくおはせしに、御くつ取りて奉り給へりき。はかなかりし御心よせの、後、位に即き給ひて、今日に至るまで、かたみに、ふた心なく覺しかよはし給へるに、御年の程の、今はいかゞはなど、おぼし慰むべきにもあらず。今年、五十六にこそは成りたまひしか。事にふれておぼしつゞくるに、げにことわりと、御門の御心の推量られ侍りしことなり。

第二十一　嵯峨天皇　水鏡

次のみかど、嵯峨天皇と申しき。桓武天皇の第二の御子

平城天皇のひとつ御はらなり。大同元年五月十八日に、東宮にたち給ふ。御年廿一、同き四年四月十三日位につき給ふ。御年廿四。弘仁元年正月に、太上天皇、ならの都にうつりすみ給ふ。中納言種繼の女に、内侍のかみと申し奉る人をおぼしめしき。そのせうとの、右兵衛督仲成心おちゐずして、いもうとの威をかりて、さま〴〵の横ざまの事をのみせしかども、世の人はゞかりをなして、とかくいはざりき。内侍のかみも、心ざましづまり給はざりし人にて、太上天皇にことにふれて、位をさり給ひにし事の、口をしきよしをのみ申しきこえしかば、くやしくおぼす心、やう〳〵いでき給ひし程に、九月に内侍のか

み、太上天皇をすゝめたてまつりて、位にかへりつきて、われきさきにたゝむといふ事いできて、世の中しづかならず。さゞめきあへりし程に、みかど、内侍のかみの、つかさ位をとり給ふ。仲成を土佐國へながしつかはすよし、宣旨をくださせ給ひしに、太上天皇、おほきにいかり給ひて、十日畿内のつはものを、めしあつめ給ひしかば、みかど、關をかためしめ給ひて、田村麿の中納言の大將と申しゝを、にはかに大納言になし給ひてき。ことすでにおこりしかば、かねて將軍の心を、いさまさせ給ひしにこそ。さて十一日に、太上天皇いくさをおこして、内侍のかみと、ひとつ御こしにたてまりて、東國のかたへむ

かひ給ひしに、大外記上毛頴人、ならより馳せまゐりて、太上天皇、すでに、諸國のいくさをめしあつめて、東國へいり給ひぬと、みかどに申しゝかば、大納言田村麿、宰相綿麿をつかはして、その道をさへぎりて、仲成を射ころしてき。太上天皇の御方のいくさ、にげうせしかば、太上天皇、すぢをくてかへり給ひて、御ぐしおろして、入道し給ひてき。御年三十七なり。内侍のかみ、自いのちをうしなひてき。おそろしかりし人の心なり。太上天皇の御子の、東宮をすてたてまつりて、みかどの、御おとゝの大伴親王とて、淳和天皇のおはしましゝを、東宮にたてまをさせ給ひき。すべて太上天皇の御方の人、つみをかうぶ

るおほかりき。同き二年正月七日、初めて青馬を御らんじき。廿三日に豐樂院に出でさせ給ひて、ゆみあそばして、親王已下いさせたてまつらせ給ひしに、みかどのおほんおとゝの葛井親王は、いまだをさなくおはして、弓い給ふうちにも、おぼしよらざりしを、みかどたはぶれて、親王をさなくとも、弓矢をとり給ふべき人なり。いたまへとのたまひしに、親王たちはしりて、いたまひしに、ふたつの矢、みあまとにあたりにき。生年十二にぞなりたまひし。母かたのおほぢにて、田村麿大納言、その座に侍りて、おどろきさわぎよろこびて、えしづめあへずして、座をたちて、むまごの親王を、かきいだきたてまつり

て、まひかなでて、御門に申〳〵ていはく。田村まろ、昔おほくの軍の將軍として、ゑびすをうち平げ侍りしは、たゞみかどの御威なり。つはものゝみちを、ならふといへども、いまだきはめざるところおほし。いま親王の年いとけなくして、かくおはする、田村麿さらにおよび奉るべからずと申しき。今も昔も子孫をおもふ心は、あはれにはべる事なり。さて程なく、五月廿三日田村麿うせにき。年五十四になむありし。かたちありさま、ゆゝ〳〵かりし人なり。たけ五尺八寸、むねのあつさ一尺二寸、目はたかのまなこの如く、ひげは、こがねの絲すぢを、かけたるが如し。身を重くなす時は、二百一斤、かろくなすをりは、六

十四斤、心にまかせて、折にしたがひしなり。いかれる折は、まなこをめぐらせばたけき獸みなたふれ、わらふ時は、かたちあつかしく、稚き子もおぢおそれずいだかれき。たゞ人とは見え侍らざりしなり。同き四年、冬嗣やましあ寺のうちに、南圓堂をたて給ひき。その時藤氏の人、わづかに、三四人おはせしをなげきて、氏のさかえを願じて、たて給へりしなり。まことにそのしるしとみえ侍るめり。神武天皇よりのち、みかどの御うしろみ、代々におはすれども、子孫あひつぎて、けふあすまで、かくおはするは、この藤氏こそはおはすめれ。同き十四年、みかど、位を御おとゝの東宮にゆづり奉りて、やがてその御子

の治部卿親王恒世を、東宮にたて申し給ひしを、親王あながちにのがれ申し給ひて、こもりゐて、御つかひをだに、通じ給はざりしかば、仁明天皇のみ子にて、おはしましを、東宮にたて申し給ひき。位をこそ、東宮にておはしませば、かぎりありて、ゆづりたてまつり給はめ。わが御子の、おはしまさぬにてもなきに、弟の御子を、東宮にさへ立て奉らむと、し給ひし御心は、ありがたかりしことなり。

第二十二　藤原時平　大鏡

このおとゝは、基經のおとゝの御太郎なり。御母四品彈正尹人康親王の御女なり。醍醐のみかどの御時、このお

と〻左大臣の位にて、とこしいとわかくておはしき。菅原のおとゝは、右大臣の位にておはします。そのをりみかど、おほん年いと若くおはします。左右の大臣に世のまつりごと、おこなふべき宣旨くださしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年廿八九ばかり、右大臣、御年五十七八にやおはしけむ。共に世の政事をせしめ給ひし程に、右大臣ざえも世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心掟も、ことのほかにかしこくおはします。左大臣は、御こしもわかく、ざえもことのほかに、おとりたまへるによりて、右大臣御おぼえことの外におはしましたるに、左大臣やすからずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけむ。

右大臣の御ために、よからぬ事いできて、昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になしたてまつりて、ながされ給ふ。このおとゝの子ども、あまたおはせしに、をんな君だちは、むこどりし、をこ君たちは、みなほど〳〵につけて、位どもおはせしを、それもみなかたゞに、ながされ給ひてかなしきに、をさなくおはしけるをこ君、をんな君だち、したひなきておはしければ、ちひさきはあへなむと、おほやけもゆるさしめ給ひしかば、ともにゐてくだり給ひしぞかし。みかどの御おきて、きはめてあやにくに、おはしませば、この御子どもを、おなじかたにだにつかはさゞりけり。かたゞにいとかなしくおぼしめし

て、御まへの梅の花を御らんじて、「こちふかば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ」。又亭子のみかどに聞えさせたまふ、流れゆくわれはみくづとなりぬとも君しがらみとなりてとゞめよ」。あき事によりて、かくつみせられ給ふを、からくおぼしなげきて、やがて山前にて、出家せしめ給ひてけり。日頃へて、都遠くなるまゝに、あはれに心ぼそくおぼされて、君がすむやどの梢をゆく〳〵とかくるゝまでもかへりみしはや」。また播磨國におはしましつきて、明石のうまやといふ所に、御やどりせしめ給ひて、うまやのをさの、いみじう思へるけ〳〵きを御らんじて、つくらせ給へる詩いと

かなし。

驛長無驚時變改　一榮一落是春秋

かくて、筑紫におはしましつきて、ものあはれに心ぼそくおぼさるゝゆふべ、をちかたにところ〴〵けぶりたつを御らんじて、夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそもえはじめけれ」。又、雲のうきてたゞよふを御らんじても、山わかれとびゆく雲のかへりくるかげみるときぞおほたのまるゝ」。さりともと、世をおぼ〳〵めされけるなるべし。月のあかき夜、うみあらずたゞよふ水のそこまでも清き心は月ぞてらさむ」。これいとか〳〵こく、あそば〳〵たりかしげに月日こそは、てら

し給はめとこそはあめれ。まことに、おどろ〳〵しきことは、さる物にて、かくやうのうたや詩などをさへ、いとなだらかに、ゆゑ〳〵しう、いひつゞけまねぶに、見きく人〻めもあさま〳〵く、あはれにもまもりゐたり。物のゆゑゐありたる人なども、むげにちかくゐよりて、ほかめせず、見きくけしきども見て、いよ〳〵はへて物をくりいだすやうに、いひつゞくるほどぞ、まことに希有なりや。ゐげきなみだをのごひつゝ、けうじゐたり。つくしにおはします處の御門も、かためておはします。大貳のゐどころはるかなれども、樓のうへのかはらなどの、心にもあらず、御らんじやられけるに、又いとちかく、觀音寺

といふ寺のありければ、かねのこゑをきこしめして、つくらせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色　觀音寺只聽鐘聲

これは、文集の白居易の、遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看といふ詩にもまさゞまに、つくらしめ給へりとこそ、むかしのはかせどもは申しけれ。又かのつく〳〵にて、九月十日菊の花を御らんじけるついでに、まだ京におはしましし時、九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、このおとゞの、つくらせ給へりける詩を、みかどかしこく感じたまひて、御衣をたまはせ給へりしを、つくしにもてくだらしめ給へりければ、御らんずるに、いとゞその

をりおぼしめしいでゝ、つくらせ給ひける、

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

この詩いとかゝこく、人々かんじ申されき。この事ども、たゞちり〳〵なるにもあらず。かの筑紫にて、つくりあつめさせ給へりけるを、かきて一巻とせ〳〵め給ひて、後集となづけられたり。又、をり〳〵の歌を、かきおかせ給へりける、おのづから、世にちりきこえしなり。世つぎがわかう侍りし時、この事のせめて、あはれにかな〳〵く侍りしかば、大學の衆の、なまふがうには、いまずかりしを、とひたづねかたらひとりて、さるべきゐぶくろ、わりご

やうのもの調じて、うちぐしてまかりつゝ、ならひとりて侍りしかど、老のけのはなはだしきことは、みなこそわすれ侍りにけれ。これはたゞ、すこぶるおぼえ侍るなりといへば、きく人々、げに〳〵いみじきすきものにも、物し給ひけるかな。いまの世の人は、さる心ありなむやと、かんじあへり。また雨のふる日、うちなかめ給ひて、あめの〳〵たかわけるほどのなければやきて〳〵ぬれぎぬひるよ〳〵もなき。やがて、かしこにて、うせさせたまへり。夜のうちにこの北野に、そこらの松をおほさ〳〵め給ひて、わたりすみ給ふをこそは、たゞいまの北野宮とまをして、あら人神におは〳〵ますめれば、おほやけも行幸

せしめ給ふ。いとかしこくあがめ奉り給ふめり。つく〳〵のおは〳〵ましゝ所は、安樂寺といひて、おほやけより別當所司などなさせたまひて、いとやんごとな〳〵。かくてこのおとゞは、つくしにおはして、延喜三年、みづのとの亥、二月二十五日にうせたまひしぞか〳〵。御年五十九、さて後七年ばかりありて、左大臣時平のおとゞ、延喜九年、己巳四月四日うせ給ふ。御歳三十九、大臣の位にて、十一年ぞおはしま〳〵ける。本院の大臣と申す。このおとゞは、やまと魂などは、いみじくおはしましたるものを、延喜の世間の作法したゝめさせ給ひしかど、過差をばえしづめさせ給はざりしに、この殿制をやぶりたる御さう

ぞくの、ことの外にめでたきをして、内にまゐり給ひて、殿上にさぶらひ給ふを、みかど、小蔀より御らんじて、御けしき、いとあしくならせたまひて、職事をめして、世間の過差の制きびしきころ、左のおとゞの、一の人といひながら、美麗ことの外にてまゐれる、便なきことなり。はやくまかりいづべきよし、おほせよとおほせられければ、うけたまはる職事は、いかなることにかと、おそれおもひけれど、まゐりてわゐゝく〳〵、しか〳〵の事と申しければ、いみじくおごろき、かしこまりうけたまはりて、御隨身の、みさきまゐるも制したまひて、いそぎまかりいで給へば、御前どもゝ、あやしとおもひけり。さて本

院の御かど、一月ばかりさゝせて、みすの外にもいで給はず。人などのまゐるにも、勘當のおもければとて、あはせ給はざりしにこそ、世の中の過差は、たひらぎたりしか。うち〳〵にうけたまはりしかば、さてばかりぞしづまらむとて、みかどと御心あはせさせ給へりけるとぞ。」

此の左大臣、物のをかしさぞ、えねんぜさせ給はざりける。わらひたゝせ給ひぬれば、すこぶる事も亂れけりとか。北野と、世をまつりごたせ給ひける間、非道なる事おほせられければ、さすがにやんごとなくて、せちにし給ふことをば、いかゞはとおぼして、このおとゞのし給ふ事なれば、不便なりとみれど、いかゞはすべからむとな

げき給ひけるを、なにがしの史が、ことにも侍らず。おのれが構へて、この御事をとゞめ侍らむと申しければ、いとあるまじき事、いかにしてかはなど、の給はせけるを、たゞ御覽ぜよとて、座につきて、ことときびしくさだめ罵り給ふに、この史、ふみばさみに、ふみはさみて、いらなく振舞ひて、このおとゞにたてまつるとて、いと高やかにならして侍りけるに、おとゞ、ふみもえとらずして、わなきて、やがて笑ひて、けふはすぢなし。右のおとゞにまかせ申すとだに、いひやり給はざりければ、それにこそ、菅原のおとゞ御心のまゝにまつりごち給ひけれ。

第二十三　源平二氏　　増鏡

武きものゝふの起を尋ぬれば、古、田村など云ひけむ將軍等の事は、耳遠ければさし措きぬ。そのかみより今に至るまで、源平の二ながれぞ、時により折にしたがひて、おほやけの御守とはなりにける。桓武天皇と聞えし御門をば、柏原帝とも申しけり。その御子に、式部卿の御子と聞えしより、五代の末に、平將軍貞盛といふ人、維衡、維時とて、二人の子をもたりけり。間近く榮えし、西八條の清盛のおとゝは、彼の太郎維衡より六代の末なりき。其の一門亡びしかば、此の頃は、僅にあるかなきかにぞさまよふめる。さて彼の維時が名殘は、ひたすらに民となりて、平四郎時政といふ者のみぞ、伊豆國北條とかやに

あめる。それも維時には、六代の末なるべし。又源氏武者といふも、清和御門、あるは宇多院などの御後ごもなり。二條院の御時、平治の亂に、伊豆國蛭が島へ流されし、兵衛のすけ頼朝は、清和御門より八代のながれに、六條判官爲義と云ひし者のうま子なり。左馬頭義朝が三郎になむありける。西八條の入道おとゞ、やう〳〵榮華衰へむとして、後白川院をなやまし奉りしかば、安からずおぼされて、彼の頼朝を召出でて、軍を起したまひしに、然るべき時やいたりにけむ。平家の人々は、壽永の秋の木枯に散りはてゝ、遂にわたつ海の底のもくづと沈みにし後、頼朝いよ〳〵權を施して、更に君の御うゝろ見仕

うまつる。相摸國鎌倉里と云ふ所に居りながら、世をたなごゝろの中に思ひきみな人しり給へる事なれば、今更に、申すもなか〳〵なれど、院の上、位につかせ給ひし初より、世のかためとなりて、文治元年四月、二のは〳〵をのぼり〳〵も、八島の内のおとゞ宗盛をいけどりの賞ときこゆ。建久のはじめつ方、都にのぼる、そのいきほひのいかめ〳〵き事、いへば更なり。その年の十二月九日、權大納言にあがされ、右近大將をかねたり。〳〵はすの朔日ごろよろこび申〳〵て、同き四日、やかてつかさをかへ〳〵たてまつる。此の時ぞ、諸國のそうついふくしといふこさうけたまはりて、地頭職に、我が家の強者ども、をな〳〵あつ

めける。この日本國の、おところふる始は、これよりなるべし。さて東にかへり下るころ、上下いろ〳〵のぬさおほかりしなかに、年ごろもいのりなごし給ひにし吉永僧正、かのながうたの座主のたまひつかはしける、あつまぢのかたになこその關の名は君をみやこにすめどなりけり。御かへ〳〵賴朝、みやこには君もあふさかちかければなこその關はとほきとを〳〵れ。かくて新院の御位のはじめつかた、正治元年正月あづまにて、か〳〵らおろ〳〵て、同き十三日に、年五十三にてかくれにけり。治承四年よりあめの下に、もちひられて、廿年ばかりやすぎぬらむ。北のかたは、先にきこえつる北條四郎時政

のむすめなり。そのはらにをの子ふたりあり。太郎をば頼家といふ。弟をば實朝ときこゆ。大將かくれてのち、兄は、やがて、立ちつぎて、建久元年六月廿二日從二位、同き日將軍のせんじをたまはる。又の年、左衛門督になさる。かゝれども、すこ〳〵おちゐぬ心ばへなどありて、やうやうつは物ども、そむき〳〵にぞなりにける。時政は遠江守といひて、故大將のあり〳〵時より、わたくしのう〳〵ろ見なり〳〵を、まいて今は孫の世なれば、いよ〳〵身おもく、いきほひそふ事かぎりなくて、うけばりたるさまなり。子二人あり。太郎は宗時といふ。次郎は義時といひけり。次郎は、心もたけく、魂まされる者なるが、左衛門督を

ば、ふさは〳〵からず思ひて、弟の實朝の君に、つき〳〵たがひて、思ひかまふる事などもありけり。かうは、日にそへて人にもそむけられ行くに、いみじき病をさへ〳〵て、建仁三年九月十六日、年廿二にてか〳〵らおろす。世の中殘おほく、何事もあたら〳〵かるべき程なれば、さこそ口を〳〵かりけめ。をさなき子の一萬といふにぞ、世をばゆづりけれど、うけ引く者なし。入道は、かの病つくろはむとて、鎌倉より伊豆國へ、いでゆあびに越えたりける程に、か〳〵この修善寺といふ所にて、つひにうたれぬ。一萬もやがてうしなはれけり。これは、實朝と義時と、ひとつ心にたばかりけるなるべし。さて、今はひとへに、實朝故大

將の跡をうけつぎて、つかさ位とゞこほる事なく、よろづ心の儘なり。建保元年二月廿七日、正二位にせられしは、閑院の内裏造れる賞とぞきこえ侍りし。同き六年權大納言になりて、左大將をかねたり。左馬ノ頭をさへぞつけられける。その年、やがて内大臣になりても、なほ大將もとのまゝなり。父にもやゝ立ちまさりて、いみじかりき。このおとゞは、おほかた心ばへうるはしく、猛くもやさしくも、よろづ目やすければ、ことわりにも過ぎて、武士のなびき從ふさま、父にもこえたり。いかなる時にかありけむ。山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも」とぞよみける。時政は、建保三年にか

くれにしかば、義時ぞ跡をつぎける。故左衛門ノ督の子にて、公曉といふ大とこあり。親のうたれにしことを、いかで、やすき心あらむ。いかならむ時にかとのみ、思ひわたるに、この内大臣、又右大臣にあがりて、大饗など、めづらしく東にておこなふ。京より尊者をはじめ、かんだちめ、殿上人、おほくとぶらひいま〳〵けり。さて鎌倉にうつ〳〵奉れる、八幡の御やゝろにじんばいに詣づる、いとゝいかめしきひゞきなれば、國々の武士は更にもいはず、都の人々もこせうしけり。たち騒ぎのゝしり、もの見る人もおほかる中に、かの大とこ、うちまぎれて、女のまねをして、しろきうす衣ひきをり、おとゞの車よりおるゝ程を、

さしのぞくやうにぞ見えける。あやまたずくびをうち落〳〵ぬ。その程のとよみ、いみじさ、思ひやりぬべ〳〵。かくいふは、承久元年正月廿七日なり。そこらつどひあつまれるものども、たゞあきれたるほかなし。京にもきこ〳〵めしおどろく。世の中火をけしたるさまなり。こせうに、西園寺の宰相中將實氏もくだり給ひき。さらぬ人々も、なく〳〵袖をしぼりてぞのぼりける。いまだ子もなければ、立ちつぐべき人もなし。事しづまりなむ程とて、故おとゞの母、北のかた二位どのといふ人、ふたりの子をもうしなひて、涙ほすまもなくしほれすぐすをぞ、將軍にもちひける。

第廿四　後醍醐天皇の還幸　增鏡

かの島には、春來てもなほ浦風さえて浪荒く、渚の氷紐解けがたき世の氣色に、いとゞおぼ〳〵結ぼるゝ事つきせず。かすかに心細き御すまひに、年さへ隔りぬるよと淺ましくおぼさる。侍ふ人々も、〳〵ぼ〳〵こそあれ。いみじくくんじにたり。今年は、正慶二年といふ。閏二月あり。後のきさらぎの初つ方より、とりわけて密教の秘法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數へて、さすがいたうこうじ給ひにけり。心ならず、まどろませ給へる曉方、夢うつゝともわかぬ程に、後宇多院、あり〳〵ながらの御面影、さやかに見え給ひて、聞えさせ給ふ事多かりけり。

打驚きて夢なりけりとおぼす程、いはむ方なく名殘悲〳〵。源氏の大將、須磨浦にて、父御門見たてまつりけむ夢の心地〳〵給ふも、いとあはれにたのも〳〵う、いよ〳〵心强さ增りて、かの〳〵ほぢが、御迎のやうなる釣舟も、たより出できなむやと、待るゝ心地〳〵給ふに、大塔宮よりも、海人のたよりにつけて、聞えたまふ事たえず。都にも、なほ世の鎭りかねたるさま聞ゆれば、萬におぼ〳〵慰めて、關守のうちぬるひまをのみうかゝひたまふに、然るべき時の到れるにや。御垣守に侍ふつはものどもゝ、御氣色をほの心得て、なびき仕うまつらむと、思ひ心づきにければ、さるべき限かたらひ合せて、おなじ月の二十四

日の曙に、いみじくたばかりて隱ろへゐて奉る。いとあやしげなる海人の釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれに、おし出すをりしも、霧いみじう降りて行くさきも見えず。いかさまならむとあやふけれど、御心を靜めて念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹きすゝみて、その日の申の時に、出雲國に着かせ給ひぬ。こゝにてぞ、人々心地しづめにける。おなじ廿五日、伯耆國稻津浦といふ所へ遷らせ給へり。この國に、那波又太郎長年といひて、あやしき民なれど、いとまうに富めるが、類廣く、心もさが〳〵しくむね〳〵しき者あり。彼がもとへ宣旨をつかはしたるに、いとかたじけなしと思ひて、取敢へず、五

百餘騎の勢にて、御むかへに參れり。又の日、賀茂、社といふ所にたち入らせ給ふ。都の御社おぼし出でられて、いとたのもし。それより船上寺といふ所へおはしまさせて、九重の宮になずらふ。これよりぞ、國々のつはものどもに、御敵を亡すべき由の宣旨つかはしける。比叡、山へものぼされけり。かくて隱岐、國には、出でさせ給ひにしひるつ方より騷ぎあひて、隱岐、前、守おひて參るよ〳〵聞ゆれば、いとむくつけくおぼされつれど、こゝにもその心〳〵て、いみじう戰ひければ、引返しにけり。都にもあづまにも、驚き騷ぐさま思ひやるべし。正成が城のかこみに、そこらの武士ども、かしこにつどひをるに、かゝる事

さへ添ひにたれば、いよ〳〵あづまよりも上りつどふめり。三月にもなりぬ。十日あまりの程、俄に世の中いみじうのゝしる。何ぞと聞けば、播磨、國より、赤松なにがし入道圓心とかやいふ者、先帝の勅に從ひて攻來るなりとて、都の中あはて惑ふ。例の六波羅へ行幸なる。兩院も御幸とて、上下たち騷ぐ。馬車走りちがひ、武士どもの、うちこみのゝしりたるさま、いとおそろし。

卯月の十日餘、又あづまよりものゝふ多く上る中に、をゝし笠置へも向ひたりし、治部、大輔源、尊氏上れり。院にもたのもしく聞召して、かの伯耆の船上へ向ふべき由、院宣賜はせけり。あづまを立ち〳〵時も、うしろめたく、

ふた心あるまじき由、盟ひごと文をかきてけれども、そこの心やいかゞあらむ。かく聞ゆるすぢもありけり。この尊氏は、古の頼義朝臣の名殘なりければ、本の根ざしやんごとなき武士なれど、承久よりこの方、かしらさし出す源氏もなくて、埋れすぐしながら、類ひなく、勢四方に滿ちて、國々に心よせの者多かれば、かやうに國の危きをりをえて、思立つ道もやあらむなど、したにさゝめくもしるく、伯耆、國へ向ふべしと云ひあつて、まづ西山大原わたりに一とまりして、五月七日、ほの〴〵とあくる程より、大宮の木戸ども押開きて、二條よりしも、七條の大路を東ざまに、七手にわかれて、旗をさし續けて、六

波羅をさして、雲霞の如く棚引入るに、更におもてを向ふる者なし。この治部、大輔、はやうより先帝の勅を承賜りければ、さかさまに、都を亡さむとするありけり。昨日かとよ。當代の宣旨を賜はりし者の、かくうらがへりぬれば、誰かはおもひよらむ。すべて上下となく、ひとつに立ちこみてあわて惑ひたり。日暮、八幡、竹田、宇治、勢多、深草、法性寺など、もえあがる煙ども、四方の空にみちみちて、日のひかりも見えず。墨をすりたるやうにて暮れぬ。こゝにも火かゝりて、いとあさましげなれば、いみじう固めたりつる後の陣を、からうじてやぶりて、それより、まぬかれて出でさせ給ふ御心地ども、夢路をたど

るやうなり。内のうへも、いとあやしき御すがたに、ことさらやつし奉る。いとまがゝしく、兩院も御手を取りかはすといふばかりにて、人にたすけられつゝ出でさせ給ふ。上達部大臣たち、はかまのそばとりて、冠などの落ちゆくもしらず、空をあゆむ心地〳〵して、あるは河原を西へ東へ、さまざまちりにちり給ふ。兩六波羅、ひんがゝさゝて、あづまへと心がけて落ちければ、御幸も同じさまになゝ奉りけり。

さて御幸は、近江國におはします程に、いぶきといふほとりにて、なにがゝの宮とかや。法師にていましけるが、先帝の御心よせにて、かやうのかたも、ほの心得侍るに

や。待受けて矢を放ち給ふ。又都よりも、追手かゝるなど聞えければ、六波羅の北といひ〳〵仲時、内春宮兩院ぐし奉り、番馬といふ所の山の上に、入れたてまつりけり。手の者どもゝ、なほ殘りて從ひつきけれども、戰もかなはずやありけむ。遂にこの山にて腹きりにけり。同じき南時益といひしは、是までも參らず、守山の邊にて、うせにけりとぞ聞えし。綾なくいみじきことのさまなり。

伯耆の御所へは、人々參りつどふ上達部殿上人數をしらず。さる程に、あづまにもかねて心しけるにや。尊氏のするの一族など、新田小太郎義貞といふもの、いまの尊氏の子、四つありけるを大將軍にして、武藏國よりいく

さを起してけり。この頃あづまの將軍は、守邦親王にておはします。御うしろ見仕うまつる、高時入道、貞顯入道、城介入道圓明、長崎入道圓基などいふ者ども、驚き騷ぎて、高時入道の弟に、四郎左近、大夫泰家といひし、今は入道したるをぞ、大將にくだ〳〵ける。五月十四日、鎌倉を立ちて向ふ。其の勢十萬餘騎、高時入道の一族つき從ふ者、そこら皆廣ごりて、鎌倉始まり〳〵頼朝の世、時政より今に至るまで、おほくの年月をつめり。僅なる新田ぞ云ふ國人に、たやすくいかでかは、亡さるべきと覺えしに、程なく十五日、かたき既に鎌倉に近附く由聞えて、家々をこぼち騷ぎのゝしる。世のすでに滅するにやと覺し

しとぞ、人は語り侍りし。四郎左近、大夫入道、單にうちまけゝるにや。從ふ武士ども、殘りなく新田が方へつきぬれば、えさらぬ者どもばかり、五六百騎にて、十六日の夜に入りて、鎌倉へ引歸る。僅に中一日にてかくありぬる事、夢かとぞおぼえ〳〵。かくて、日々の軍にうちまけゝれば、同じき廿二日、高時以下腹切りてうせにけり。

さて都には伯耆よりの還御とて、世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせ給ひて、事どもさだめらる。二條の前のおとゞ召しありて參り給へり。こたみ、内裏へ入らせ給ふべき儀、重祚などにてあるべけれども、璽の箱を御身に添へられたれば、だゞ遠き行幸の、還御の式にてあるべ

き由さだめらる。都の事管領あるべきよしうけ賜はる。天の下、たゞこの御はからひなるべしとて、このひとつあたり喜びあへり。六月六日、東寺より常の行幸のさまにて、内裏へぞ入らせ給ひける。めでたしともことばなし。去年の春、いみじかり〳〵はやと思ひいづるも、たとしへなく、今も御供の武士ども、ありしよりはおほ勝し。幾重ともおくうち圍みたてまつれるは、いとむくつけきさまおれど、こたみは、うとましくも見えず。たのもしくめでたき御守かおと覺ゆるも、うちつけめおるべし。

第廿五　世繼　榮華物語

世始りて後、この國の御門、六十餘代におらせ給ひにけ

れど、この次第かき盡すべきにあらず。こちよりての事をぞしるすべき。世の中に、宇多の御門と申すおはしましけり。その御門、御子達あまたおはｼましける中に、一の御子敦仁、親王と申しけるぞ、位につかせ給ひけるこそは、醍醐の聖帝と申して、世の中に、天の下めでたき例にひき奉るなれ。位につかせ給ひて、三十三年をたもたせ給ひけるに、多くの女御達侍ひたまひければ、男御子十六人、女御子あまたおはしましけり。その頃の太政大臣基經のおとゞと聞えけるは、宇多の御門の御時にうせ給ひけり。中納言長良と聞えけるは、太政大臣冬嗣の御太郎にぞおはｼける。後は贈太政大臣とぞ聞えける。

かの御三郎にぞおはしける。その基經の大臣うせ給ひて、後の御諡昭宣公と聞えけり。その基經の大臣、男君四人おはしけり。太郎は、時平ときこえけり。左大臣までなり給ひて、三十九にてうせ給ひにけり。二郎仲平と聞えけるは、左大臣までなり給ひて、七十一にてうせ給ひにけり。三郎兼平と聞えける、三位までぞおはしける。四郎忠平の大臣ぞ、太政大臣までなり給ひて、多くの年頃すぐさせ給ひける。その基經の大臣の御女の女御の御腹に、醍醐の宮達あまたおはしましけり。十一の御子寛明、親王と申しける、御門に居させ給ひて、十六年おはしまして、後におりさせ給ひておはしけるぞ、朱雀院の御門

とは申しける。その次、おなじ女御の御腹の十四の御子、成明、親王と申しける、さし續きて御門に居させ給ひにけり。天慶九年四月十三日にぞ居させ給ひける。朱雀院は、御子達おはしまさざりけり。唯、王女御と聞えける御腹に、えもいはず美しき女御子、一所ぞおはしける。母女御も御子三つにてうせ給ひにしかば、御門われ一所、心苦しきものに養ひ奉り給ひける、いかで后にする奉らむとおぼしけれど、例なき事にて、口惜しくてぞ過させ給ひける。昌子内親王とぞ聞えさせける。かくて今の上の御心ばへ、あらまほしくあるべき限おはしまし〜けり。醍醐の聖帝、世にめでたくおはしましける、又この御門、

堯の子の堯ならむやうに、大かた御心ばへ雄々しう、氣高く賢うおは〳〵ますものから、御才もかぎりあし。和歌の方にもいみじうしませ給へり。萬になさけあり。物のはえおはしまし、そこらの女御、御息所參り集り給へるを、時あるも時なきも、御志のほどこよなけれど、いさゝかはぢがましげに、いとほしげに、もてなしなどもせさせ給はず。おのめにあさけありて、めでとうおぼしめし渡して、あだらかにおきてさせ給へれば、この女御、御息所達の中にも、いとめやすくびんなき事聞えず。くせぐせしからずなどして、御子生まれ給へるは、さる方に重々しくもてなさせ給ふ。さらぬは、さべう御物忌などに

て、つれ〳〵におぼさるゝ日などは、御前に召出でて、碁、雙六うたせ、篇をつかせ、石なごりをせさせて、御覽じなごまでぞおはしましければ、皆かたみにあさけをかはし、おかしうなむおぼしあひける。かく御門の御心のめでたければ、吹く風も枝をならさずあどあればにや。春の花も匂ひのごけく、秋の紅葉も枝にとゞまり、いと心長閑なる御有樣あり。只今の太政大臣にては、基經の大臣の御子、四郎忠平の大臣、御門の御をぢにて、世をまつりごちて、おはす。そのおとゞの御子五人ぞおはしける。太郎は今の左大臣にて、實賴と聞えて、小野宮といふ所に住み給ふ。二郎は右大臣にて、師輔の大臣、九條といふ

所に住み給ふ。三郎は御有樣おぼつかなし。四郎師氏と聞えける、大納言までぞなり給ひける。五郎、師尹の左大臣と聞えて、小一條といふ所にすみ給ふ。

第廿六　月の宴　榮華物語

康保三年八月十五夜、月の宴せさせ給はむとて、清涼殿の御前に、皆、方わかちて前栽うゑさせ給ふ。左の頭には、繪所、別當藏人少將濟時とあるは、小一條の師尹の大臣の御子、今の宣耀殿の女御の御兄なり。右の頭には、作物所、別當右近、少將爲光、是は九條殿の九郎君なり。劣らじまけじと挑みかはして、繪所の方には、洲濱を繪に書きて、種々の花、おひたるにまさりて書きたり。やり水いは

ほ皆、かきて、白かねをませのかたにして、萬の蟲どもをすませ、大井に逍遙したるかたを畫きて、鵜舟に火ともしたるかたをかきて、蟲のかたはらに歌は書きたり。作物所のかたには、おもしろき洲濱をゑりて、潮みちたるかたを作りて、いろ〳〵の作花をうゑ、松竹などをゑりつけて、いとおもしろし。かゝれども、歌は女郎花にぞつけたる。左方、君がため花うゑそむと告げねども千代まつ蟲の音にぞなきぬる。右方　心して今年はにほへ女郎花さかぬ花ぞと人は見るとも。御あそびありて、上達部多くまゐり給ひて、御祿さま〳〵なり。これにつけても、宮のおはしましゝ折は、いみじく事のはえありて、

おかしかりしはやと、上より始め奉りて、上達部こひ聞え、目拭ひたまふ。花蝶につけても、今は唯、おりなばやとのみぞおぼされける。

第廿七　御賀

治安三年十月十三日、殿の上の御賀あり。土御門殿を、日頃、いみじう造りみがかせ給へれば、常よりも見所あり。面白き事限なし。春秋の花のにほひ、その盛ならねど、所々の前栽の草霜がれ、山の紅葉色をつくしたるも、ことさらめき、わざと作りたてさせ給へらむやうに見えたり。庭のすなごなども、外のには似ず見ゆ。その日になりぬれば、大宮、かんの殿は、やがておはします。日のうらゝかにさし出でたる程に、皇太后宮わたらせたまふ。御輿とあれど、一品宮のたてまつらぬがあしければ、唐の御車にてわたらせ給ふ。ふた所奉りて、五つの御方仕うまつらせ給へり。女房の車おほからず。十五ばかりぞある。袖口衣のかさなりたる程、浦の濱木綿にやあらむ。いくへと知りがたし。かくて渡らせ給ひぬる程に、さしつゞき中宮おはします。それは御輿にて内より出でさせ給ふ。御供の女房さきの車の如し。御前たちのおはしますところと、寢殿との中に、おの〳〵御座しきよそひて、御しとね參りつゝ、三宮、一品宮、かんの殿、おはします。次に又少しひきのけて、上の御前御料によそひたり。御裝束仕う

まつる殿上人、宮人、みつるありさまを思ひ參らするに、おはしましてなみゐさせ給へらむ御有樣、聞えさせむかたなく、思ひやるにめでたし。上の御方の女房、ささきは、宮の女房に劣らぬさまの裝束を、上のおまへなど、あまかたはらいたく思召すに、今日はところをえ、うけはりさうぞきたるも、こゝわりに見えておかし。大宮の女房は、寢殿の南おもて、西の渡殿かけてうち出でたり。皇太后宮のは、南の對の東おもてゐり。殿の御かたは、寢殿の東おもて、中宮の御かたは、東の對の西おもて、かんの殿の御かたの女房は、東の對の西南かけてうちいだしたり。御方々の女房の、こぼれ出でたるゐりども、千年

の籬の菊どもを匂はし、四方の山の紅葉の錦をたち重ね、すべてまねぶべきにもあらず、色々の織物、錦、唐綾など、すべて色をかへ手を盡したり。袖口には、白金、黃金のおきくち、縫物、螺鈿をしたり。御凡帳ども色々さまなり。この宮、あの宮、同じ色、一つさまにもあらず、聞えさせ合せ給へらむやうに見えて、さま變りたるいみじうめでたし。敷島やこゝの事とは見えず、高麗、唐土ゐどにやどまでぞ見えける。殿の有樣中島などの大木、皆もえにし後は、いとこよなけれども、今生出で植ゑさせ給へるに、木ども前栽などは、今少し生ひゆく末たのもしげに見えたり。此の頃は、なつかしう今めかしくおかしき

事、四尺の屏風の繪めきたり。それだに、ためうぢ、つねのりなどがかきたらむは、古代なるべし。ひろたか、よりすけなどが書きたらむは、猶飽かぬ所ありぬべし。是はいみじうこそ面白けれ。處々の草前栽うち霜枯れて、いかにぞやあるに、一もと菊、むら菊などの、あるは盛に、あるは移ひたる、また花のなき程なればにや。今日はいとゞめで增りぬべし。木々の紅葉も折知りめでたきに、緣の松に蔦の紅葉のめでたう懸りたるに、まゆみのえもいはず照りて、押張り出でたるも、今少し近うて見まほしげなり。庭ははるゞとして、橋立のすなごなどのやうに、きらめきて見えたり。所々のあげはり、屏幔(イヽヽ)などの色、

けざやかに、つゆの色の、いとおどろ〳〵しきまで、赤う見えたる程など、け高うめでたし。人々のいそがはしきけはひの風に、木々の紅葉の少し散りて、御前の池に浮び流れたるも、かの昆明の池の水の、春秋の色の流れかはるらむも、斯やと見えたり。伊勢が、散りかゝるをや疊るといふらむと、よみたりけむも、覺え、機張廣き錦とやと、觀敎法橋のよみたりけむなどにぞ、まづ思ひよそへられける。御前近き遣水は、清く涼しくすみて、黃河の水のすみ始めたるにやと、行く末遙かに見えたり。萬の事六十をせさせ給へるに、僧も六十人を撰びめしたり。

第廿八　土佐日記　紀貫之

をここのすといふ日記といふ物を、女もして見むとてするなり。それの年の十二月廿日あまり、一日のひの戌のときにかどです。そのよしいさゝかものにかきつく。ある人あがたの四とせ五とせはてゝ、例のことゞもみあしをへて、解由あざとりて、すむたちよりいでゝ、舟にのるべき所へわたる。かれこれしるしらぬおくりす。年頃よくぐしつる人々なむ、わかれがたく思ひて、その日、しきりにとかくしつゝ、のゝしるうちに夜ふけぬ。

廿二日、和泉國までたいらかにと、ねがひたつ。藤原言實舟路なれど、馬のはなむけす。上なかしも、ゐひすきて、いとあやしく、しほ海のほとりにて、あざれあへり。

二十三日八木、康教といふ人あり。此の人、國に必しも、いでつかふものにもあらず。是ぞたゞしき樣にて、馬の餞したる。守がらにやあらむ。國人の心の常として、今はとて見えざなるを、心あるものは、はちずになむきける。是は物によりて、ほむるにしもあらす。

廿五日、守の館より、よびに文もて來れり。よばれていたりて、日一日、夜一夜、とかくあそぶやうにて明けにけり。

廿六日、猶、守の館にて、あるじしのゝしりて、をのこあまたに物かづけたり。唐詩、聲あげていひけり。倭歌、あるじも、まらうども、殊人もいひあへりけり。からうたは、是にはかゝず。倭歌あるじの守のよめりける、都出でゝ君

にあはむとこし物をこしかひもなく別れぬるかな」と
なむ有りければ、歸る前の守のよめる、　白妙の浪路を
遠く行きかひて我ににべきは誰あらなくに」こと人々
のも有りければ、さかしきもあかるべし。とかくいひて、
前の守も、今のも、もろともにおりて、今のあるじも、さき
のも、手取りかはして、ゐひごとに、心よげある事して出
でにけり。
廿七日、大津より浦戸をさしてこぎいづ。かくあるうち
に、京にて生れたりし女子、こゝにして、俄にうせにしか
ば、此の頃の出でたち、いそぎをみれど、何事もえいはず。
京へ歸るに、女子のあきのみぞ、かなしみこふる。ある人

人もえたへず。此の間に、ある人のかきていだせるうた、
都へと思ふも物のかあしきは歸らぬ人のあればな
りけり」またある時には、あるものと忘れつゝ猶なき
人をいづらとこふぞかなしかりける」と云ひける間に、
鹿兒崎といふところに、守の兄弟、又こと人、これかれ、酒
あごもておひきて、磯におりゐて、わかれがたき事をい
ふ。守のたちの人々の中に、此のくる人々ぞ、心あるやう
には、いはれほのめく。かくわかれがたくいひて、かの人
人のくちあみも、もろもちにて、此の海べたににあひい
だせる歌、をしと思ふ人やとまると葦鳧のうちむれ
てこそ我は來にけれ」といひてありければ、いといたく

めで丶、ゆく人のよめりける、棹させどそこひしられぬわだつみのふかき心を君にみるかな」といふ間に、かぢとり、ものゝあはれもしらで、おのれし酒をくらひつれば、はやくいなむとて、しほみちぬ。風も吹きぬべしと騒げば、舟にのりなむとす。此のをりに、ある人々折ふしにつけて、から歌ども、時ににつかはしきをいふ。又ある人、西ぐにあれど、かひうたなどいふ。かくうたふに、ふなやかたのちりもちり、空行く雲もたゞよひぬとぞいふなる。こよひうら戸にとまる。藤原言實、橘季衡こと人々もおひきたり。

廿八日、うら戸よりこぎいでゝ、大みなとをおふ。この間

に、はやくの守の子、山口千岑、酒よきものどももてきて、舟に入れたり。行く〳〵のみくふ。

廿九日、大湊にとまれり。くすしふりはへて、屠蘇白散に酒加へてもてきたり。心ざしあるに似たり。

元日、猶同じ泊なり。白散をある者、夜のまどて、舟やかたに差挾めりければ、風に吹鳴させて、海にいれてえのまずなりぬ。芋も海帶も齒固もなし。かうやうの物もなき國なり。求めもおかず。今日は京にのみぞ、おもひやらるゝ。九重の門の、〳〵りくめ繩、なよしのかしら、ひゝら木ら、いかにとぞいひあへる。

四日、風ふけばえいでたゝず。昌連、酒よきもの、たいまつ

れり。かうやうの物、もてくる人々、なほしもえあらで、いささけわざせさす物もなし。にぎはゝしきやうあれど、まくる心ちす。

五日、風浪やまねば、猶おあじところにあり。人々絶えずこぶらひにく。

七日になりぬ。おあじ湊にあり。今日はあを馬を思へどかひなし。たゞ波の〜ろきのみぞみゆる。かゝる間に、人の家の池と名ある所より、鯉はなくて、鮒よりはじめて、川のも、海のも、こと物も、長びつにになひつゞけて、おこせたり。若菜ごにいれて、きじなど花につけたり。若菜ぞけふをしらせたる。歌あり。その歌、　あさぢふの野べに

しあれば水もなき池につみつる若菜なりけり」いとをかし。此の池と云ふは、名」の所なり。よき人の男に付きて、くだりて住みけるあり。此の長櫃の物は、皆人わらはまでにくれたれば、飽きみちて、舟子どもは、腹鼓をうちて、うみをさへおごろかして、波たてつべし。かくて、此の間に事おほかり。今日わりごもたせてきたる人、その名などぞや。今おもひいでむ。此の人、うたよまむと、おもふ心ありてなりけり。とかくいひ〳〵て、涙のたつなることと、うれひいひてよめる歌、　行くさきに立つしら涙の聲よりもおくれてなかむ我やまさらむ」とよめり。いと大聲なるべし。もてくるものよりは、歌はいかゞあらむ。

此の歌を、これかれあはれがれども、ひとりもかへしせず。しつべき人もまじれゝど、これをのみいたがり、物をのみくひて、夜更ぬ。此の歌主、又まからずゝいひて立ちぬ。ある人の子のわらはなるひそかにいふ。まろ此の歌のかへしせむといふ。おどろきて、いとをかしき事かな。よみてむやは。よみつべくばはやいへかしといふ。まからずとて立ちぬる人を、まちてよまむとて、求めけるを、夜更けぬとにやありけむ。やがていにけり。そも〳〵、いかゞよみたるとゝ、いぶかしがりてとふ。此のわらは、さすがにはぢていはず。しひてとへばいへる歌、行く人もとまるも袖の涙川汀のみこそひちまさりけれ。となむ

よめる。かくはいふものか。うつくしければにやあらむ。いと思はずなり。わらはごとにては、何かはせむ。をんなおきなにをしつべし。あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらむとて、おかれぬめり。

八日、障る事ありて猶おなじ所なり。今宵、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の、山のはにげていれずもあらなむといふ歌なむおぼゆる。もし海邊にてよまゝしかば、波立碍へて入れずもあらなむと、よみてましや。此の歌をおもひいでて、ある人のよめりける。

照る月の流るゝ見ればあまの川いづる港は海にざりけるとや。

九日、つとめて、大湊より、那波のとまりをおはむとて、こ

ぎ出でけり。これかれ、たがひに、國のさかひのうちはと
て、みおくりにくる人あまたが中に、藤原言實、橘季衡、長
谷部行政等あむ、御館より出で給ひし日より、こゝかし
こにおひくる。此の人々ぞ、心ざしある人ありける。此の
人々の深き心ざしは、此の海にはおとらざるべし」是よ
り今はこぎはなれて行く。これをみ送らむとてぞ、この
人どもはおひきける。かくてこぎ行くまに〳〵、海のほ
とりにとゞまる人も遠く成りぬ。舟の人もみえずあり
ぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふ事あれどかひな
し。かゝれど、此の歌を獨ごとにしてやみぬ。思ひやる
心は海をわたれどもふみしあければしらずやあるら

む」かくて、宇多の松原を行きすぐ。其の松のかず、いくそ
ばく、いく千年へたりとも知らず。本ごとに浪うちよせ、枝
ごとに鶴飛びかふ。おもしろしとみるにえたえずして、
舟人の讀める歌、　み渡せば松のうれごとにすむつる
は千世のごちとぞ思ふべらなる」とや。此の歌は、所を見
るにえまさらず。かくあるをみつゝこぎ行くまに〳〵、
山も海も皆くれ夜更けて、西東もみえずして、天氣の事
楫取の心にまかせつ。をのこもならはぬは、いとも心ぼ
そし。まして、女は、舟ぞこにかしらをつきあてゝ、音をの
みぞなく。かく思へば、舟子かぢとりは、ふなうたうたひ
て、何とも思へらず。其のうたふ歌、　春の野にてぞねを

ばなく。わかすゝきにて、手をきる〳〵、つんだるゐを、親やまぼるらむ。しうとめやくふらむ。かへらや。夜べの菜をそらごとをして、おきのりわざをして、錢ももてこず、おのれだにこず。」これゐみにおほかれどかゝず。これらを人の笑ふを聞きて、海はあるれど、心はすこしゐぎぬ。かく行きくらして泊にいたりて、おきゐ人ひとり、たうめひとりあるが中に、心地あしくして物ものし給はでひそまりぬ。

十一日、曉に舟を出して室津をおふ。人みゐまだねたれば、海のありさまもみえず。たゞ月を見てぞ、西東をば知りける。かゝる間にみゐ夜明けて、手あらひれいの事ど

もして、ひるにありぬ。今しはねといふ所にきぬ。わかき童、此の所の名を聞きて、はねといふ所は、鳥の羽のやうにやあるといふ。まだをさゐき童の事なれば、人々わらふに有りけり。女わらはゐむ、この歌をよめる。　まことにて名に聞く所はねゐらば飛ぶがごとくに都へもがな」とぞいへる。男も女もいかでとく都へもかゐと、思ふ心あれば、此の歌よしとにはあらねど、げにと思ひて人々忘れず。此のはねといふ所とふ童のついでに、又昔の人を思出でて、いづれの時にか忘るゝ。けふはまして母のかゐしむ事は、くだりし時の人の數たらねば、古き歌にかずはたらでぞかへるべらゐるといふ事を、思ひい

で、人のよめる。世の中に思あれども子を戀ふる思にまさるおもひあきかあ」といひつゝなむ。

十四日、曉より雨ふれば、おあじところに宿れり。舟君せちみす。さうじものなければ、午の時より後に、かぢとりの昨日釣りたりし鯛に、錢なければ、米をとりかけておちられぬ。かゝる事多くありぬ。かぢとり又鯛もて來れり。米さけしば〳〵くる。かぢとりけしきあしからず。

十五日、けふあづきがゆにず。くちをしく、猶、日のあしければゐざる程にぞ、けふ廿日あまりへぬる。徒に日を送れば、人々海をながめつゝぞある。そのわらはのいへる、たてば立ちゐれば又ゐる吹く風と浪とは思ふどち

にや有るらむ」いふかひあき者の言へるには、いとにつかはし。

十六日、風波やまねば、猶おなじところにとまれり。たゞ海に浪なくして、いつしかみさきといふところ、わたらむとこのみなむおもふを、風波ともに、やむべくもあらず。ある人の、此の波のたつを見てよめる歌、霜だにもおかぬかたぞといふなれど浪の中には雪ぞふりける」。さて、舟にのりし日よりけふまでに、廿日あまり五日になりにけり。

十七日、くもれる雲なくなりて、あかつきづく夜いとおもしろければ、舟をいだしてすぎ行く。此の間雲のうへ

も海の底も、おなじごとくにおむありける。うべも昔の
をのこは、棹は穿つ波の上の月を、舟はおそふ海の中
のそらを」とはいひけむ。聞きさしにきけるなり。又、ある
人のよめる、水底の月のうへよりこぐふねのさをに
さはるはかづらなるらむ」。これを聞きて、ある人、又よめ
る、影みれば涙の底なる久かたの空こぎわたる我ぞ
わびしき」。かくいふ間に、夜やうやく明行くに、楫取ら、黒
き雲俄にいできぬ。風も吹きぬべし。御舟かへしてむと
いひてかへる。此の間に雨ふりぬ。いとわびし。
十八日、猶おなじ所にあり。海あらければ舟出さず。此の
泊遠く見れども、ちかくみれども、いと面白し。かゝれど

もくるしければ、何事も思ほえず。男ごちは、心やりにや
あらむ。からうたなどいふべし。舟も出さでいたづらな
れば、ある人のよめる、磯ぶりのよするいそには年月
をいつともわかぬ雪のみぞふる」。此のうたは、常せぬ人
の事なり。又人のよめる、風による涙の磯にはうぐひ
すも春もえしらぬ花のみぞさく」。此の歌ごもをすこし
よろしと聞きて、舟の長しける翁、月ごろのくるしき心
やりによめる、たつあみを雪か花かと吹く風のよせ
つゝ人をはかるべらなる」。此の歌ごもを、人の何かとい
ふを、ある人の又聞きて、耽りてよめる、その歌よめる文
字、三十文字あまり七もじ、人みなえあらでわらふやう

あり。歌ぬし、いとけしきあしくてゐまず。まねべどもえまねばず。かけりともえよみあへがたかるべし。今日だにいひがたし。まして後にはいかならむ。

廿日、きのふのやうなれば、舟いださず。みな人々うれへなげく。くるしく心もとなければ、たゞ日のへぬるかずを、今日いくか、廿日三十日とかぞふれば、およびもそこなはれぬべし。いと侘し〳〵。夜はいもねず。廿日の夜の月いでにけり。山の端もなくて、海の中よりぞいでくる。かうやうなるをみてや、昔、安倍仲麿といひけるひとは、唐土に渡りて歸りきたる時に、舟にのるべき所にて、かの國人、馬のはなむけし、別を〳〵みて、かしこのからうた作り

なごしける、あかずやありけむ。廿日の夜の月いづるまでぞ有りける。その月は海よりぞいでける。これを見て仲麿のぬし、我が國には、かゝる歌なむ、神代より神も詠みたび、今は上中下の人も、かうやうにわかれをしみ、喜もあり、悲もある時にはよむとてよめりける歌、あをうなばらふりさけみれば春日なるみかさの山にいでし月かも」とぞよめりける。かの國の人、聞知るまじく覺えたれど、事の心を、男もじにさまをかきいだ〳〵て、こゝのことば傳へたる人に、いひ〳〵らせければ、意をや聞きえたりけむ。いとおもひの外になむめでける。もろこしと、此の國とは、言ことなる物なれど、月のかげはおなじ

ことなるべければ、人の心もおなじ事にやあらむ。さて今、そのかみをおもひやりて、ある人のよめる歌、都にて山の端に見し月なれど涙よりいでゝなみにこそいれ。

廿一日、卯の時ばかりに舟です、みな人々の舟いづ。これを見れば、春の海に、秋の木の葉、ちれらむやうになむありける。おぼろげの願によりてにやあらむ。風も吹かず、よき日いできて漕行く。此の間に、つかはれむとてつきてくる童あり。それがうたふ歌、猶こそ國のかたはみやられ我が父母ありとし思へば歸らや」とうたふぞ哀なる。かくうたふを聞きつゝこぎくるに、くろ鳥といふ鳥、巖のうへに集りをり。その巖のもとに、浪〳〵ろくうちよす。楫とりのいふやう、くろ鳥のもとに、白き波をよすとぞいふ。此のことば、何とにはなけれど、物いふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねば、とがむるなり。かくいひつゝ行くに、舟君なる人、涙を見て、國よりはじめて、海賊むくいせむと、いふなる事を思ふうへに、海のまた恐ければ、頭もみなしらけぬ。七十年八十年は、海にある物なりけり。我がかみの雪と磯べの白浪といづれまされりおきつ島守」

廿二日、夜べの泊より、こと泊をおひてゆく。遙に山見ゆ。年九つばかりなるをの童、年よりはをさなくぞある。此

の童、舟をこぐまに〳〵、山も行くと見ゆるを見て、怪きこと歌をぞよめる。その歌、こぎて行く舟にし見ればあし引の山さへ行くを松は〳〵らずや」。とぞいへる。をさなきわらはのわざにてはにつかは〳〵。けふ海あらけ、磯に雪ふり、なみの花さけり。ある人のよめる、波とのみひとへに聞けど色みれば雪と花とにまがひぬるかな」。廿三日、日照りて曇りぬ。此のわたり海賊のおそりありといへば、神佛を祈る。

廿六日、まことにやあらむ。かいそぐおふといへば、夜半ばかりより、舟をいだしてこぎくる道に、手向するところあり。楫取して幣たいまつらするに、ぬさの東へ散れ

ば、楫取は此の幣のちる方に、み舟すみやかにこがゝめたまへと申して、たいまつる。これを聞きてあるわらはの、わたづみのちぶりの神にたむけするぬさのおひかぜやまずふかなむ」。とぞよめる。此の間に風よければ、かぢ取いたくほこりて、舟に帆かけなど喜ぶ。其の音を聞きて、童も女もいつ〳〵かとし思へばにやあらむ。いたく喜ぶ。此の中に、淡路のたうめといふ人のよめるうた、

おひ風の吹きぬる時は行く舟のほでうちてこそうれしかりけれ」。とぞ。ていけのことにつけつゝいのる。

廿九日舟出して行く。うら〳〵と照りてこぎ行く。爪いと長くなりにたるをみて、日をかぞふれは、けふは子の

日なりければきらず。睦月なれば、京の子の日の事いひ出でゝ、小松もがなといへど、海中なればかたしかし。ある女のかきていだせるうた、　おぼつかなけふは子の日か海士ならばうみ松をだにひかましものを」とぞいへる。海にて、子の日のうたにては、いかゞあらむ。或人のよめるうた、　けふなれど若菜もつまず春日野の我がこぎ渡るうちになければ」かくいひつゝこぎ行く。おもしろきところに舟を寄せて、こゝやいづこと問ひければ、土佐のとまりとぞいひける。昔、土左といひける所に住みける女、此の船に交りけり。某いひけらく、昔しば〳〵ありし所の名のたぐひにぞあなる。あはれといひてよ

める歌、　年頃をすみ〳〵ところの名に〳〵おへばきよるなみをもあはれとぞ見る」。

三十日、雨風ふかず。海賊は、夜ありきせざりと聞きて、夜半ばかりに舟を出して、阿波のみとを渡る。夜中なれば、西東も見えず。男女、からく神佛をいのりて、此のみとをわたりぬ。寅卯の時ばかりに、奴島といふ所を過ぎて、田無川といふ所を渡る。からくいそぎて、和泉灘といふところに至りぬ。今日海に、波に似たる物な〳〵。神佛のめぐみかうぶれるに似たり。今日舟にのり〳〵日よりかぞふれば、三十日あまり九日になりにけり。今は和泉國にきぬれば、海賊物ならず。

二月朔日、朝の間雨ふり、午時ばかりにやみぬれば、和泉灘といふところより出でて漕行く。海の上昨日のごとくに、風波みえず。黒崎の松原をへて行く。所の名はくろく、松の色は青く、磯の波は雪のごとくに白く、貝の色は、蘇枋にて、五色にいま一色ぞたらぬ。此の間に、けふは、箱浦といふ所より、綱手ひきて行く。かく行く間に、ある人のよめる歌、　玉くしげはこの浦浪たゝぬ日はうみをかゞみと誰かみざらむ。又、ふね君のいはく。此の月までなりぬる事とて、おげきてくるしきにたへずして、人もいふ事とて、心やりにいへる歌、　ゆくふねのつなでの長き春の日を四十日五十日までわれは經にけり。聞く

人の思へるやう、なぞたゞことなると、ひそかにいふべし。舟君の、からくひねりいだ〳〵て、よ〳〵と思へる事を、えしもこそ誣ひねとて、さゞめきてやみぬ。俄に風波たかければとゞまりぬ。

四日、かちとり、けふ風雲のけ〳〵き、はゐはだあ〳〵といひて、舟いださずゐりぬ。しかれども終日に波風たゝず。このかちとりは、日もえはからはぬかたゐなりけり。このごまりのはまには、くさ〳〵のうるは〳〵き貝石ゐどおほかり。かゝればたゞ、むか〳〵の人をのみ戀ひつゝ、舟なる人の讀る、　よする波うちもよせゐむ我がこふる人わすれ貝おりてひろはむ。といへれば、ある人の堪へず

して、舟のこゝろやりによめる、　わすれ貝ひろひしもせじ〳〵ら玉を戀ふるをだにもかたみと思はむ」とあむいへる。女兒のためには、親をさなくなりぬべ〳〵。玉ならずもありけむをと、人いはむや。されども、しに〳〵こ、顔よかりきといふやうもあり。猶おなじところに、日をふる事をあげきて、ある女のよめる歌、　手をひてゝ寒さも〳〵らぬ泉にぞくむとはなしに日ごろへにける」。五日、けふからくして、いづみのなだより、小津のとまりをおふ。松原、目もはるゞ〳〵なり。かれ是くるしければよ浦る歌、　ゆけどなほ行きやられぬは妹がうむをづのめなるき〳〵の松ばら」かくいひつゝくるほどに、舟とく

こげ。日のよきにともよほせば、楫取、舟子どもにいはく。御舟よりおほせたぶなり。朝北のいでこぬさきに綱手はやひけ」といふ。このことばの歌のやうなるは、楫取のおのづからの詞なり。楫取は、うつたへに、われ歌のやうなる事いふとにもあらず。きく人のあやしく、歌めきてもいへるかなとて、書きいだせれば、げに三十文字あまりなりけり。けふ波あ立ちそと、人々ひねもすに祈る驗ありて、風波たゝず。いましかもめむれゐて、遊ぶところあり。京のちかづく喜のあまりに、ある童のよめる歌、いのりくるかざまとおもふをあやなくにかもめさへだに浪と見ゆらむ」といひて行く間に、石津といふと

ころの松ばら、おもしろくて濱べ遠し。又すみよしのわたりをこぎ行く。ある人のよめる、今見てぞ身をばしりぬる住の江のまつよりさきに我はへにけり」。こゝにむかし人の母、ひと目かた時もわすれねばよめる、住の江に舟さしよせてわすれ草しるしありやとつみて行くべく」となむ。うつたへに忘れなむとにはあらで、こひしき心ちしばし休めて、又も戀ふる力にせむとぞあるべし。かくいひてながめつゝくる間に、ゆくりなく風ふきて、たけごも〳〵、ゐりへしぞきにしぞきて、ほと〳〵しく、うちはめつべし。かぢ取のいはく。この住よしの明神は、れいの神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむとはいま

めくものか。さて、ぬさをたいまつり給へといふに從ひ、幣たいまつる。かくたいまつれども、もはら風やまで、いやふきにいや立ちに、かぜ波のあやうければ、楫取又いはく。ぬさには御心のゆかねば、御舟もゆかぬなり。猶、嬉しと思ひたまふべき物たいまつり給へといふ。又いふに從ひて、いかゞはせむとて、眼もこそ二つあれ。たゞひとつある鏡をたいまつるとて、海にうちはめつれば口惜し。されば、うちつけに、海は鏡のごとなりぬれば、ある人のよめる歌、ちはやふる神の心をあるゝ海に鏡をいれてかつみつるかな」。いたく住の江の忘草、岸の姫松あごいふ神にはあらずかし。めもうつら〳〵、鏡に神の

心をこそはみつれ。楫取の心は、神の御心なりけり。六日、みをづくしのもとより出でて、難波の津をきて、河尻にいる。みな人々、女をさなきもの、ひたひに手をあてて喜ぶ事二つなし。かの舟酔の淡路、島のおほひこ、都近くなりぬといふを喜びて、舟底より頭をもたげさせて、かくぞいへる。いつしかといぶせかりつる難波がた葦こきそけて御舟來にけり」と、いとおもひの外なる人のいへれば、人々あやしがる。これが中に、こゝちなやむ舟君、いたくめでゝ、舟酔し給ひし御かほには、似ずもあるかなとぞいひける。

七日、けふは川尻に舟いり立ちてこぎ上るに、川の水ひ

てなやみわづらふ。舟の上るこゝいとかたし。かゝる間に、舟君の病者（ヤマウド）、もとよりこちゝしき人にて、かうやうのこと、さらにしらざりけり。かゝれども淡路のたうめの歌にめでて、京誇にもやあらむ。辛くして、あやしき歌ひねり出せり。その歌、

來ときては川の堀江の水を淺み舟も我が身もなづむけふかな

是は病をすればよめるなるべし。一歌に事の飽かねば今一つ、

さくとおもふ舟なやますは我がためにに水の心のあさきなりけり」。

此の歌は、京ちかくなりぬる喜にたへずしていへるなるべし。淡路のこの歌に劣れり。ねたきいはざらましものをと、くやしがるうちに入りてねにけり。

八日、おほ河のほとりになづみて、鳥養の御牧といふほとりにとゞまる。今宵、舟君例の病おこりて、いたく惱む。ある人、あざらかなるものもてきたり。米してかへり事す。をとこども、ひそかにいふなり。飯ぼしてつるとやう。かうやうの事所々にあり。けふせちみすれば魚もちひず。」九日、心もとなきにあけぬ。から舟を引きつゝ上れども、川の水あければ、ゐざりにのみぞゐざる。此の間に、和田、泊のあがれのところといふところあり。米魚など乞へば贈りつ。かくて舟引きのぼるに、汀の院といふ所をみつゝ行く。その院の昔を思ひやりてみれば、おもしろかりけるところなり。〜りへなる岡には、松の木どもあり。

中の庭まは梅の花さけり。こゝに人々のいはく。これは昔、名高く聞えたる所なり。惟高の御子の御供にて、在原、業平の中將の、世の中に絶えて櫻のさかざらば春の心はのどけからまし。といふ歌よめる所なりけり。今、興ある人、所に似たる歌よめり。千世へたる松にはあれどいにしへの聲のさむさはかはらざりけり。又ある人のよめる、君戀ひて世をふる宿の梅のはな昔の香にぞ猶にほひける。といひつゝぞ、京の近づくをよろこびつゝ上る。かくのぼる人〻の中に、京より下りし時に、みな人子どもなかりき。いたれりし國にてぞ、子生める者どもありあへる。みな人、舟のとまる所に子をいだきつ

つ、おりのぼりす。これをみて、むかしの子の母、かなしきにたへずして、なかりしもありつゝ歸る人の子をあり〳〵もなくてくるがかなしさ」といひてぞなきける。父もこれを聞きていかゞあらむ。かうやうの事、うたこのむさて、あるにしもあらざるべし。唐土も、こゝも思ふ事に、たへぬ時のわざとか。今宵、宇土野といふ所に泊る。十一日、雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさ〳〵上るに、東の方に山のよこほれるを見て、人にとへば八幡宮といふ。これをきゝて喜びて、人々をがみたてまつる。山崎のはしみゆ。うれしき事かぎりなし。こゝに相應寺のほとりに、しばし舟をとめて、とかくさだむる事あり。此の寺

の岸のほとりに、柳おほくあり。ある人、この柳の川の底に映れるをみてよめる歌、さゝれ波よする紋をばあをやぎの陰の絲して織るかとぞ見る」。

十四日、雨ふる。けふ、車京へとりにやる。

十五日、けふ車將てきたれり。舟のむつかしさに、舟より人の家にうつる。此の人の家、よろこべるやうにて、あるじしたり。此のあるじの、又あるじのよきをみるに、うたておもほゆ。色々にかへりごとす。家の人のいでいりにくげならず。いやゝかあり。

十六日、けふの夕つかた、京へのぼるついでにみれば、山崎のたなゝる小櫃の繪も、まがりのほらのかたも、かは

らざりけり。うる人の心をぞしらぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。たちてゆきし時よりは、くる時ぞ、人はとかくありける。これにもそれにもかへり事す。夜になゝて、京にはいらむと思へば、いそぎしもせぬ程に、月いでぬ。桂川、月のあかきにぞわたる。人々のいはく。此の川、飛鳥河にもあらねば、ふち瀬さらにかはらざりけりといひて、ある人のよめる歌、

久かたの月におひたる桂川底ゐる影もかはらざりけり。

又ある人のいへる、

天雲のはるかなりつるかつら川袖をひてゝも渡りぬるかな。

京のうれゝきあまりに、歌もあまりぞおほか

る。夜ふけてくれば、所々も見えず。京に入りたちてうれゝ。家にいたりて門に入るに、月明ければ、いとよくありさまみゆ。きゝしよりもまして、いふかひなくぞこぼれやぶれたる。家をあづけたりつる人の心もあれたるなりけり。中垣こそあれ。ひとつ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなり。されば、たよりごとに、物もたえずえさせたる、今宵かゝる事と、聲高にものもいはせず、いとはつらく見ゆれど、心ざしはせむとす。さて、池めいてくぼまり、水づける所あり。邊に松もありき。五年六年のうちに、千年やすぎにけむ。かたは枝はなくなりにけり。今おひたるぞまじれる。大かたみなあれにたれば、あはれとぞ

人々いふ。思ひいでぬ事なく、おもひ戀きがうちに、此の家にて、生れたりし女兒の、諸共に歸らねば、いかゞは悲き。舟びともみな、子抱きてのゝしる。かゝるうちに、猶かなしみにたへずして、ひそかに心しれる人といへりける歌、生れしもかへらぬ物をわがやどに小松のあるをみるがかなしさ。とぞいへる。なほあかずやあらむ。又なむ、見し人を松の千年にみましかば遠くかなしきわかれせましや。わすれがたく、口をしき事おほかれど、えつくさず。とまれかくまれとくやりてむ。

増補訂正中等國文五の卷下終

明治三十二年二月十五日增補訂正第三版印刷
明治三十二年二月二十日增補訂正第三版發行
明治三十二年六月十九日文部省檢定濟
改正定價金二十五錢
毎冊定價金二十二錢

中學校國語科教科用書

編纂者　井上賴圀　東京市麹町區麹町二丁目十四番地
編纂者　逸見仲三郎　東京市麹町區中六番町二十九番地
發行兼印刷者　吉川半七　東京市京橋區南傳馬町壹丁目十二番地
印刷所　吉川印刷工場　東京市京橋區柳町五番地

版權所有